

対称性認知科学の論点と広がり： 「誌上討論」の編集にあたって

服部 雅史・山崎 由美子

本号に掲載されている7篇の誌上討論は、本誌第15巻3号（2008年9月発行）における特集「対称性：思考・言語・コミュニケーションの基盤を求めて」（以下では「対称性」特集）を受けた企画に寄せたものである。そこで、この特集について、まずは担当エディタとして簡単に総括しておきたい。

「対称性」特集の意義は、次の3点にあると考えている。第1は、このテーマ自体のユニーク性と発展性である。「対称性」という特集テーマは、われわれが知る限り国内外で前例がない。だからこそ、企画当初は、このようなテーマで論文が集まるのかという不安も大きかった。幸いにも、われわれの予想に反して大部の特集となったが、そのせいもあり、現在では、このテーマの発展性を以前にも増して実感している。

第2の意義は領域的広がりである。このテーマは、いわゆる「縦割り」の（教科書の1章になるような）テーマではない。対称性とは、非常に限定的な特性である反面、関連領域は限りなく広い。その意味でユニークであり、また意義深い。特集に掲載された論文のバックグラウンドは、行動分析学、比較行動学、思考心理学、発達心理学、情報科学、理論言語学、理論生物学、哲学など、多岐にわたる。

第3の意義は、行動分析学との接点である。対称性を含む刺激等価性は、1970年代以降、行動分析学の中で精力的に研究されてきた（山本論文参照）。行動分析学のアプローチに、認知科学と一線を画す側面があるとしても、そこで累積されてきた研究成果に大きな意義があることに疑いはない。認知科学も、その成立から半世紀が経過し、この間に大きな

発展を遂げると同時に、認知科学自体も、ゆっくりと、しかし大きく変容してきた。認知科学のスタンスやアプローチも、外部とのイデオロギー的関係の構図も、時間とともに変化している。新たな接点の再認識が、認知科学において、あるいは行動分析学において、あるいは全く別のところで、今後どのように展開するかかわらないが、われわれとしては、ある種の希望と期待をもってこの「接点」に関わっていきたいと考えている。

このような「対称性」特集に対して、やはり多様な観点から、示唆的で生産的なコメントにあふれる「誌上討論」原稿が寄せられた（以下、括弧内は著者名〔敬称略〕）。すなわち、特集の中で扱いが少なかったコミュニケーションの観点を含めた行動分析学からの総説（山本）、認知発達からみた言語使用と推論の関係についての論評（針生）、言語学からみた対称性という問題の意義と位置づけに関する論評（坂本）、比較実験心理学からみた人間の特殊性についての考察（嶋崎）、知識構造と類似性という新しい観点による認知心理学からの論評（鈴木・大西）、対称性推論に関する独創的な論理学的分析（中川）、対称性についての方法論的提案（岡）の計7篇である。

以上の誌上討論は、領域、観点、内容などの点において、特集に掲載された論文と相補的な位置関係を保っている。つまり、特集の論文での議論を受けて正面から対峙しているというよりは、むしろ、このテーマについてより深く考えるための新しい視点を提供していると言える。前回の特集論文での議論に対して、今回の誌上討論による新たな視点や論点の指摘が加わることで、今後の新しい研究展開の可能性が広がるかもしれない。このようなプロセスを経て、対称性という個別テーマを超え、また領域の垣根を超えて、認知の様々な問題に新たな洞察が

もたらされることを願ってやまない。

謝 辞

タイトなスケジュールのせいで、著者および査読者・読者の方々には、非常に無理なお願いをした。また、誌上討論担当編集委員の藤木大介氏には終始献身的にご尽力頂いた。編集委員長の野島久雄氏と事務局の新垣紀子氏には、今回もいろいろ相談に乗って頂きお世話になった。このように、多くの方々のご尽力があったからこそ本企画が実現した。この場を借りて心からの謝意を表したい。

なお、本研究企画は、日本学術振興会科学研究費補助金（課題番号 19500229）の資金援助を受けた。



服部 雅史 (正会員)

1964年生まれ。1996年北海道大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。博士（文学）。1997年より立命館大学文学部。2003–2004年英国（ウェールズ）カーディフ大学心理学部客員研究員。現在、立命館大学文学部教授。推論、意思決定、問題解決などの高次認知機能の研究に従事。人間の思考・言語・コミュニケーションの適応的合理性に興味を持つ。日本心理学会（2007–編集委員）、日本基礎心理学会、Cognitive Science Society、ほか会員。
hat@lt.ritsumeit.ac.jp



山崎 由美子 (正会員)

2001年慶應義塾大学社会学研究科心理学専攻博士課程修了。博士（心理学）。2002年ドイツ Ruhr-Universität Bochum 訪問研究員。2004年理化学研究所象徴概念発達研究チーム研究員を経て、2008年より慶應義塾大学社会学研究科特別研究准教授。鳥類、霊長類における推論、道具使用、概念、系列行動を研究。日本動物心理学会、日本認知科学会、日本神経科学会各会員。